

<セッション構成>

公益社団法人化学工学会第 44 回秋季大会 (東北大学)

シンポジウム <材料・界面討論会「材料創成と界面現象」>

一日目：F103-F109 (部会長による部会展望スピーチと依頼研究講演 2 件)

F113-F124 (一般研究講演 10 件)

二日目：F201-F209 (一般研究講演 9 件)

三日目：F301-F309 (一般研究講演 9 件)

および,

シンポジウム <材料・界面討論会ポスターセッション「材料創成と界面現象」>

二日目：XA2P41-XA2P84 (全 44 件 うち 7 件ポスター賞受賞)

オーガナイザー 長尾大輔 (東北大)・小林芳男 (茨城大)・車田研一 (福島高専)

筆：車田

2012 年 9 月 19 日, 20 日, 21 日の 3 日間にわたり東北大学で公益社団法人化学工学会第 44 回秋季大会が開催された。プログラムどおり, 材料・界面部会の部会本体のセッションでも多くの発表がなされた。今回はとくに部会本体の行事報告書の作成の担当にあたっていたこともあり, 久々に全発表を前席で拝聴した (2 件は自身で登壇)。筆者自身は, 地震後は諸般の処理で完全に忙殺され, 自分の登壇日以外に化学工学会の春秋の全国大会の会場にいられたことはいっかひもなかったこともあり, ややセンチメンタルな懐かしさを感じるところもあった。学会に全日程参加して多くの講演を拝聴できることは幸運なことだとつくづく実感した。

個々の発表内容については, 発表者それぞれの研究の進捗に応じて堅調な報告がなされたことは明らかであったので, ここではとくに筆者の印象を述べるべきことはないと考え。2 件の招待研究講演 (関谷氏・染谷氏「**プリンタブルエレクトロニクスの新応用と将来展望**」(山村幹事紹介), 大園氏「**微小なしわ: マイクロリンクルの研究**」(塩井幹事紹介)) はいずれもすぐれた研究のプロフェッショナルの手腕をひしひしと感じさせるものであり, 聴講者それぞれにいろいろな考えをわかせたものであろうと拝察する。通例のことではあろうが, セッション全体として比較的是ばひろい内容を包括的に含んでいる点において, 化学工学会の全国大会らしい雰囲気があった。ポスターセッションも充実しており, 44 件の発表のうち 7 件が僅差でポスター優秀賞に選出された。宮原部会長の発案によるはじめてのこのころみとしてポスターセッションのあとに部会学生一若手研究者交流会がひらかれ,

盛況であった。

今回、口頭講演にさきだって宮原稔部会長の20分間の部会展望スピーチ「材料・界面部会の「いま」と「これから」」がなされた。そのなかで宮原部会長がとくに強調していたのは、「議論・討論を重視する部会」だった。このことは部会発足当初から十年余りにわたりつねにくりかえし標榜されてきたことであり、筆者も茫洋とながらも、それをごく標語的に意識しながら部会に参加してきたように思う。いちおう、議論を活性化するというのだからこれは質疑をするようにかくも物理的に努力せねばなるまい、という単純なアクション方針で、やたらに質問をくりかえす癖は身につけてしまった。その意味で、「討論の場としての学会」という標語じたいにわたし自身はとりわけには体感的違和感はないのだが、そこに具体的なメリットのイメージをみいだす労をわたしたち自身ははらってきいていなかったように思う。すなわち、さて討論する学会とは？、と自問して瞼を閉じたときにあたまたに泛かぶ光景がつかめないということと、ではいざ討論というのだから、実際に問答を間断なくしている会場にいわせたときになにを得うるか？という問いにこたえられないという問題である。もっと言うと、やたらに質疑をする努力にはたして意味があるのだろうかという自己反省である。

今回は三日間、オーガナイザーの末席として全発表を拝聴・拝見させていただいたこともあるので、その「討論の場としての学会」をすこし空想的に再考してみた。(筆者が報告書を今回担当したのは、じっさいのセッションの実施にあたっての実務は長尾幹事、小林幹事に完全にもっていただいたからである。その意味で、まさにオーガナイザーの末席である。)

学会にでるとというのは、なににせよ日常とはかなり異なる心象をもたらしてくれるのは事実である。スピーカーとして登壇するときのいごごちの悪さはけっして「なれ」で消失するようなものではないことは、長年にわたりなんど学会にでても、登壇予定の数日前からのげんなりするような緊張感覚が齢をかさねるにしたがって弱まっていくようなものではないことから明らかだ。これは登壇という物理的な配置関係によるところが大きい。スピーカーは、たいていは数十名のオーディエンスがむけてくる視線をなかば妄想的に感じながら、しばらくのあいだひとりで話さなくてはならない。この物理的な「さらしもの」感覚は、たとえ講義などで多くの学生の前で話することになれていても、スピーカー側が「門を叩く」立場にいるという絶対的な関係性のくびきがあるいじょう、それとは別物である。登壇してオーディエンスの眼前で話す、という物理的な配置下におかれたとき、スピーカーはいわば強制的にそれまで自分がその一部だったオーディエンスに対して、たったひとり、「完全な外部者」の立場へ転位することになる。オーディエンスはこの瞬間に登壇者を完全に視聴対象として扱いはじめ、同時に登壇者はオーディエンスを自身から完全に(意図的に)物理的に引き離された集団として認識せざるをえない。いざ話しはじめようとする、いままで自分がいた「オーディエンス」は一斉に自分に視線を向けている。(すくなくとも、そう感じられることは重要である。)スピーカーにとっては、なにか強制

的に審判の力場にひきずりだされてサーチライトを容赦なく集中的にあてられたような当惑感があり、またそれを常識的なやりかたでそつなく紳士的に処理をすることが求められている。これとは対照的に、オーディエンスの側は順繰りに登壇者が交替しようと、あまり自身と登壇者との関係性を変えることはない。ようするに、ばあいによっては、いや、かなり多くのばあい（←筆者のばあい）、たんにぼうっとしているのである。オーディエンスの側は、聴いている場において、登壇者の他者性を意識することは強要されない。むしろ意識してもよいのだが、すくなくともオーディエンスであるということは、物理的にスピーカーとの他者性を意識することを強要されはしない。これは、オーディエンス側はじいっと坐って、いれかわるスピーカーを余裕をもって眺めている、という物理的な状況によるところが大きい。このスピーカーとオーディエンスのあいだの非対称な関係性は、瞬間瞬間にものごとを処理することを要求される日常の業務でのほぼ対称的な会話の場面とはことなり、じつはかなり学会に特異的なものであって、眼前 1m にいる相手と「ディスカッション」するのとはまったく異なる。さらにこの非対称はいっしゅの予備的膠着性をもたらす。スピーカーの側にたたされたときの「こおる・かたまる」ことに対する「怖れ（びびり）」は、なかなかふだんの生活では感じる心象ではない。さらには、紙面にむかって字を書き続ける作業の際の「書くことがでてこない」という意味においての膠着感覚とも、その体感的性質は相違する。これに対して、一般的に、学会であってもオーディエンスの側は登壇者の感じる「膠着寸前感」を感じないもので、よほど奇異なことがおこらないうざり、スピーカーのバクバク感には無頓着であるといつてよい。学会の会場にふとはいると、この二種類の心境のありかたがひとつの部屋にあって辺を接しており、かつ、片方にとっては他一方はまるで別世界であることに不思議な感覚を覚える。

むろん、学会には多くの人それぞれがそれなりの時間と労力をはらってやってくる。短い人生の貴重な時間を割くのだから、それだけの「せっかく学会に来たのだから（→学会にきたときにしかもてない感覚がほしい）」という率直な心情感覚にむくいてくれるようななにかがほしいと思うのは当然だ。じつは筆者は、学会というものが（どの学会であっても）そもそも、不特定多数の人がそれぞれに多忙な日常をかいくぐってにわかに参加するというその性質上、それほど絶対的にはインスピレーションに満ちたものであるとも思わないし、ましては、ほかの研究者によるいわば研究のよいところどりの話をわずかな時間だけ拝聴したからといって、なにかその発表内容としてそれが目からウロコをおとしてくれるような啓発的な御利益をもたらしてくれるようなことがそうそうあるとは思わない。念のため付言すれば、これはけっして学会で発表される諸研究群が無意味であるといっているのではなく、その労作や、長年積みあげられ、洗練されたテクニック、学生諸氏による完成度の高いプレゼン、それを可能にしている教員の教育能力の高さにはしばしば感嘆し、わたし自身には到底できないと感ずることが多い。逆にいうと、ひとつのことを人に情熱とインスピレーションの萌芽を込めて話せるようになるくらいまで研鑽をつむというのは、そのようすぐれた研究者の高いポテンシャルをもってしても、やはり非常にたいへんなこ

となのだと思う。ようするに、インスピレーションを放つなどということは、だれにとっても並外れて難しいことなのだし、そのようなことはにわかには目標にすべきことでもない。ただ、どのような学会でも、やはり実際にじぶんで登壇してみるということじたいが、シンプルな意味で物理的・強制的に話し手自身をオーディエンスに対して完全に他者にしてくれるので、そのときに登壇者が感じる寄る辺のないいごごちの悪さが学会の最大の意義なのだろう。その意味では、学会はやはりじぶん自身でころぼそい思いをしながら、なかば誤謬や批判的な指摘も覚悟で、刹那さしこんでくる多数の視線に自意識過剰になってびびりながら登壇し、話すことが重要なのだと思う。おそらくたいていの場合、オーディエンスはスピーカーが自意識過剰気味に考えているほどにはまんじりとはスピーカーのことをみてはいない。だが、スピーカーは、そのオーディエンスの刺すような視線を敢えてトレーニング・シミュレーションに利用することが肝要なのだろう。

宮原部会長が3日間にわたりくりかえし言及した「セルフ登壇のすすめ」のねらいは、たとえ馴れ親しんだ化学工学会であっても20分間のスピーチのあいだ「さらしもの」になるスリルをすすんであじわおう、ということだろう。学会という、いささか贅沢な、日常からのエスケープのもっとも基本的で重要な活用法はそれなのだろうと考え、忘れまいと思った。